19世紀前半のバイエルンにおける国土美化 特別委員会と美化協会の活動

赤坂 信*

Die Deputation für die Landesverschönerung und die Verschönerungsvereine
in der ersten Hälfte des 19. Jhts. in Bayern.

Makoto AKASAKA

摘要：19世紀初頭に国土美化を提唱したフォアヘアは活動の拠点を国土美化特別委員会におき、農会などと連携をはかりながらその思想の普及に努める。国土美化を容認する王権の交代とともに特別委員会は解体するが、国土美化思想の影響をうけた美化協会(市民団体)がこの運動を担うことになる。しかし美化協会の活動は社会計画的な視点に欠け、局所的な美化装飾にはしって後に批判されるが、これは国土美化思想の大衆化の一形態といえよう。

1. はじめに

19世紀初期のバイエルンにおいて「統一ドイツをヨーロッパのエデンに」変えようという国土全体の美化が、G. フォアヘアによって提唱された。この提唱の契機と目的および国土美化理想の成立の背景について前稿(造園雑誌, Vol. 47, No. 5, 1984)で説明を試みた。本稿では国土(農村)美化の展開期¹⁾ともいうべき19世紀前半に焦点をあて、「提唱」によって設立された国土美化特別委員会およびこの時代に続々と結成された美化協会の成立の経緯と運動の展開について考察し、その時代的意味と役割を明らかにしたい。

2. フォアヘアと国土美化特別委員会の成立

(1) 国土美化の提唱者について

19世紀初頭に「統一ドイツをヨーロッパのエデンに」変えようというドイツ国土の美化がバイエルンの建築土木技師、G. フォアヘアによって提唱された。ナポレオン戦争によって外国勢力に支配されていた時代にこの国土美化(Landesverschönerung)は大きな反響を呼び、ドイツの各地で国土美化の試みが実施されたといわれている。ここで国土美化の提唱者フォアヘアについてその略歴を述べておきたい。

G. フォアヘア(Johann Michael Christian Gustav VORHERR)は1778年にフロイデンバッハ(Freudenbach 当時のアンスバッハ Ansbach 侯国)で、地方の土木技師の息子として生まれた。エアランゲン(Erlangen)大学とマールブルク(Marburg)大学で国家学と建築学を学び、さらにベルリン、パリの美術アカデミーに通った。

その後プロイセン王国の給費を受けて建築土木技師の見習いとして故国アンスバッハに赴いた。1800~1803年には GÖRTZ 侯のもとで城や庭園、農場施設、橋梁の設計建設にあたり、建築家の地位を得た。フルダ(Fulda)において1803~1806年に ORANIEN 侯に奉職、そして1806~1809年にはフランス皇帝の建築土木技師として道路や教会、学校、宮廷や御料地付属の建物、製塩所などの建設にあたった。

1809年に郡の建設視察官としてミュンヘンへ赴任して以来、1815年建設顧問官、1817年内務省の臨時上級委員、1818年イザール(Isar)郡政府の建設監督官を歴任した。1823年ミュンヘンに王立バイエルン建築学校を創設し、1847年に亡くなるまで学校長として教育指導に尽力したといわれている。²⁾

フォアヘアが国土美化を訴えたのは、ドイツにいながら、フランス皇帝につかえていたフルダ奉職時代である。この間に彼は国土美化に関する3つの論文を、法律・政治・産業に関する総合誌 Allgemeiner Anzeiger der Deutschen に投稿(1807, Nov. 1808, Dec. 1808)し、その10年余後に(建設監督官としてミュンヘン在職中)同誌に再び国土美化について投稿(1819)するのである。

図-1
Gustav VORHERR
(1778-1847)
〈DÄUMEL, 1961〉

* 千葉大学園芸学部

上記の4論文が発表される10年余の間はバイエルンをめぐる政治状況はきわめて不安定なものであった。バイエルンは1806年にフランスの保護をうけて王国に昇格するが、形勢不利とみるや反フランスに転じて自国に有利な立場を確保する(1815)という変転ぶりをみせる。一方、フォアヘア自身は建築土木技師としての社会的地位を確保しつつ、フランス支配下のフルダ時代に国土美化の構想を練っていた。そしてミュンヘンで論文を発表した翌年(1820)から国土美化のための特別委員会の組織づくりが、より強力に行なわれるのである。³⁾

(2) 国土美化特別委員会の設立

国土美化を実現させるための組織づくりはすでに1810年代に開始されていた。1812年3月にフォアヘアは、設立されてもないバイエルン農会(Landwirtschaftlicher Verein in Bayern)のなかに国土美化に関する特別委員会(Deputation, 以下文中では特別委員会と略す)をつくることを提案している。同年翌月に農会の中央委員会(General-Comité)は農業関連の建築物の改善を目的とする特別委員会を独自に組織することを決定し、この特別委員会によって農業建築物の調査が行なわれたといわれている。⁴⁾またバイエルン工芸会(Polytechnischer Verein in Bayern)にも同会の創設者のひとりであるフォアヘアが特別委員会の設置を呼びかけていた。このような組織づくりへの努力が、両会のメンバーで構成されるバイエルン国土美化特別委員会(Deputation des Landwirtschaftlichen und Polytechnischen Vereins für Bauwesen und Landesverschönerung in Bayern)の設立(1821)として結実するのである。この組織化について注目すべきことは、フォアヘアがやがて全国的組織網をもつことになる農会⁵⁾に特別委員会設置を働きかけたことであろう。農業が国家経済を支配していた時代において、農会は国家行政と緊密な関係をもつ傾向にあったが、農業に関する意見・情報が領邦の境をこえて交流するいわば横断的な性格を有していた。したがって、農会の組織を通じて国土美化思想の普及が可能であるとフォアヘアが期待していたと思われる。ともあれ農会のメンバーも、農業関連の上層階級もしくは知識階級といった農村社会における指導的な地位にいる人々で占められていた。一般に農民が読み書きができるようになった19世紀中頃になって農会の組合員活動は急速に高まるが、フォアヘアが国土美化の担い手と期待する対象は前者の「識者」たちであった。バイエルン農会設立の提案は、バイエルン憲法(1808)に続く自由主義政府の産物であった。この特別委員会もフォアヘアらの国土美化運動を容認する国王Maximilian I. Josephの擁護の下にあり、やがて王権の交替(1825)によって特別委員会は消滅していった(1830)。

3. 国土美化特別委員会の活動とその影響

(1) 特別委員会の活動

前述のように1810年代と20年代に特別委員会設置の動きがみられる。1812年に組織された特別委員会は小は納屋から大は大農場主の邸宅の規模にいたる農業建築全般についてその状態、配置、構造及び建設材料を調査した。農会の中央委員会は、バイエルンのあらゆる建築家農場経営者に住居、畜舎、堆肥調製および堆肥置場について、また農産物の選別、処理についての体験と調査を報告することを要請した。ドイメル(G. DÄUMEL 1961)によれば、1815年には146点の建築図面が収集され、これらの図面は必要に応じてそのコピーを安価で販売したといわれている。しかし1818年以降、特別委員会の機関誌への寄稿、投書が涸渇するなど、国土美化への関心が次第にうすれる傾向をみせ、同時に特別委員会のメンバーの何人かが欠けることによって組織自体も弱体化した。

フォアヘアはそこで組織強化のための巻きかえしをはかり、1820年代に運動は第2の興隆期をむかえた。1820年に彼は農会と工芸会に「バイエルンの国土を美しくする会(Gesellschaft für nützliche Verschönerung des bayerischen Landes)」を設立することを要請し、両会の下部組織として国土美化特別委員会の設立がとりきめられた。また、特別委員会が毎月会合をもつこと、機関誌を発行することとなった。この機関誌が、後の『月刊・建築土木と国土美化(Monatsblatt für Bauwesen und Landesverschönerung)』となり、国土美化特別委員会の活動を全国に伝える他、国土美化の思想を啓蒙普及する月刊誌となるのである。特別委員会は農会から4名、工芸会からはフォアヘアを含む3名で構成され、委員長に農会側から枢密院顧問官のV. HAZZIそして書記長にフォアヘアが選出された。

翌1821年1月に最初の特別委員会が開かれ、活動の基本方針について次のように明らかにされた。

この特別委員会は、教訓的であることよりも都市農村に住む人々の豊富な体験に学ぶことを活動の原則とする。その結果を議題にすることによって世間一般の関心を引き出すことができるのである。

またドイメル(1961)は、特別委員会の議事録(1821年5月26日付)の摘要に「人類および人間社会の進歩は、なにか輝いたちあらわれるもののなかにではなく、ごく一般の生活のなかに生まれ出る静寂で地味なものなかにそれを求めねばならない」という決まり文句(Formel)がくり返さられていると指摘している。これは「小さなものからのみ真に偉大なものが生まれる」というフォアヘアの当時の考え(1819)と共通するものである。当初、理想の支配者の手による国土美化の推進を期待していたフォアヘア(1807, 1808)は華美なバロック建築

や庭園の造営にあい変わらず熱心な現実の支配者の所為に幻滅し、「美化」の対象をドイツの国土 (Land) という漠然としたものから農村 (Land) — フォアヘアのいう小さなもの — へと縮小限定していた。⁶⁾こうした彼の考え方が、特別委員会の活動の基本方針に反映したものとされる。

また 1821 年に特別委員会は機関誌に、「村落の改善・美化を考えているところには特別委員会が助言と指導を行ない、さらに進行中の計画の診断が必要とあらばその改善も行なう用意がある」と述べている。こうした事業運営にかかる費用に対し、特別委員会はバイエルン王国の内務省に資金等の援助を次のように求めている。すなわち有能な職人の養成、マスタープランの配布、村落美化への報奨金、すぐれた建設材料の発見・発明に対する賞金、才能ある職人の旅費支給、機関誌の無償配布に対する援助の要請である。これをうけて国は、機関誌の発行を援助する旨の訓令を同年 9 月に出し、その年の終わり頃、年間の補助金に関する王の認可がおりるのである。

1821 ～ 23 年の間に特別委員会は、計画的かつ目的的な村落の美化・改造 10 件に報奨金を出し、さらに 1825 年には内外の諸侯政府や市町村の関係部局あてに地域の美化計画に関する規定 (Allgemeine Bau- und Landesverschönerungsordnung) の構想を賞金付で公募するなどの活動がみられた。しかし 1826 年から国家の援助が

うちきられる。これは、国王 Maximilian I. Joseph が死去 (1825) し、息子の Ludwig I. が王位についたことによる。Ludwig I. は、壮大な建築物の造営や離宮や宮廷を飾る美術品の収集に熱中し、これが国土美化を推進する側と鋭く対立することとなった。ドイメル (1961) によれば、バイエルンの内政で王は 1830 年から自由主義勢力を抑圧しはじめると同時に、特別委員会が消滅したとしている。10 年間発行されてきた機関誌も 1830 年に廃刊となったのである。

ここで特別委員会の活動の有力な手段となった前述の機関誌『月刊・建築土木と国土美化』について説明を加えておきたい。この機関誌は特別委員会の議事録の摘要や報告・論文、有用な提言などを収めた会報であると同時に公共建築物や土地改良、造園技術などに関する内外の著作の概要の他、模範となる公共福祉建築、集落地としての都市・農村の現状に対して合目的に美化 (zweckmäßig verschönert) する計画案の提示、国土美化関連の条例制定のニュースなど情報誌としての役割もあわせ持つものであった。1824 年には機関誌が 500 部増刷され、4500 部が発行されたといわれている。⁷⁾国土美化運動に最も大きな影響力をもつものが、特別委員会の活動であり、そしてこの機関誌 (Fachorgan) として『月刊・建築土木と国土美化』の存在であった。次に特別委員会の活動が及ぼした影響とフォアヘアの同時代人による国

図-2 Pfarrdorf Freudenbach
現況図 (1821)

図-3 同地区 (図-2) の美化計画図
＜図-2, 3 ともに DÄUMEL 1963＞

曲りくねった旧道を計画ではまっすぐな並木道に拡幅し河川は区画されたブロックに沿う流路とする。教会附属の埋葬地は集落外の北東部に移設し、跡地は緑地とすることなどが計画図からうかがえる。

土美化に関する活動について述べる。

(2) 特別委員会の活動の波及とフォアヘアらの国土美化の認識

フォアヘアらを中心とするミュンヘンの特別委員会設立を発端に、ドイツの各地に国土美化に関連する特別委員会組織が次々に生まれた。ミュンヘンの特別委員会の初会合が開かれた翌1822年にプロイセンでは造園家レンネ (P. J. LENNÉ) を中心に王立園芸促進協会 (Verein zur Beförderung des Gartenbaues) が設立された。国王をはじめ有力な貴族や政治家、学者、専門家を設立メンバーとするこの団体は農業、都市計画 (建設)、建築、造園の分野で精力的な活動をやがて展開することになるのである。ミュンヘンの特別委員会を模範とした例ではザクセン＝アンテンベルク (Sachsen-Altenberg) 公国の美術・工芸者協会の内部に1823年に組織された特別委員会がある。その他類似的団体の活動がザクセン (Sachsen) の諸国においてもさかんになり、1828年に公国の王子が特別委員会の主宰となった。この他1825年シュトゥットガルト (Zentralstelle für Landesverschönerung)⁸⁾ 1827年 ヴィッテンベルクに特別委員会が設けられた。一方、国土美化が1824年にミュンヘンの建築学校 (フォアヘアが校長) で専門科目としてとりあげられたり、1827年にヴュルツブルク大学の講義の科目 (主として道路、橋梁、水道、建設について) となる例もみられた。⁹⁾ このように国土美化運動は各地に関連の特別委員会を結成させ、同時に教育科目や研究の対象と捉えようとする傾向を生むにいたった。また特別委員会は、種々の行政部局における条例、規定、提言の策定にも影響を与えたといわれている。

国土美化が提唱されて以来、様々に分野の異なる人々が国土美化を共通の目的として理論の基盤を築こうとしていた。ともあれ、この時代は理論が体系化される段階ではない。個人庭園や公園、広場、散歩道、墓地などは国土美化にとって不可欠な対象であり、いずれも造園のカバーすべき領域である。しかしミュンヘンには当時すでに有名な v. SCKELL や EFFNER という造庭家がいしたが、彼らはもっぱら宮廷の庭の造営にかかわっていた。フォアヘアらのグループは技術面では建築・土木の専門家はいたが造園を専門とする人がいなかったため、必要とする造園の手法に独自の見解を発展させた。この意味では、国土美化に対する共通認識は必ずしも明確ではなく、また理論と実践の面でも現実と直面するたびに創意工夫が必要とされた。ドクメル (1961, 1963) はフォアヘアとともに国土美化に貢献した人々に太陽建築理論の FAUST (医師)、著作出版で国土美化思想の普及に努めた VOIT (建築家)、SCHUDEROFF (牧師)、H. v. NAGEL (税務官)、HUMANUS (教育家)、K. C. F. KRAUSE (哲学者) のグループ、『ドイツ庭園新聞 (Allgem-

eine Deutsche Garten-Zeitung) の編集者でありフラウエンドルフ (Frauendarf) 周辺で活動していた J. E. FÜRST のグループ、『月刊・建築土木を国土美化に有益な投稿をしていた GEINITZ (土木技師) と WUNDER (元パイロイト警察局長)、農業の立場からこれを重視する NIETERそしてミュンヘンの特別委員会のメンバー SCHLICHTGROLL, Al. AMMANN, J. v. BAADER, J. v. HAZZI, HÖCHL をあげている。

フォアヘアは国土美化を農業・造園・建築の分野の統合によって実現すると考え、図-4のような三角形の国土美化のシンボルマークを案出した。特別委員会の機関誌『月刊・建築土木と国土美化』の発刊4年目(1874)からこのマークが登場し、また SCHUDEROFF や v. NAGEL も自著のヴィネットとしてこれを採用していた。このマークにフォアヘアらの構想する国土美化の概念もしくは願望が端的にあらわれているといえる。フォアヘア派の国土美化論の概要については、すでに造園雑誌 (井手久登, 1968)¹¹⁾ で発表されているので、ここでは三角形の一辺である「農業」について若干の説明を加えたい。

フォアヘアらは農業の振興が耕地の整備と農業の生活向上をもたらし、同時に農村の美化も可能とすると考えた。農村の「美化」のためには「改善」(によって収益の増大をはかる農業経営)を前提とする考え方は、18世紀後半に『造園理論』を著した HIRSCHFELD にもみられる。農村の美化の条件としてフォアヘアは、著作による提言、専門家・牧師・教師の適切な助言そして農学校の設立の必要をあげている。VOIT (1822) は、耕作された土地が緑の大海原となって喜ばしい眺めとなるとき、農業は国土美化の広般な計画の一部を担うことになるとしている。また HUMANUS (1831) は豊かな耕地は常に作目を変え——当時有名なフランダース地方の農業のごとく——そこに新しいパラダイスの外観を与えると考えた。また豊かな耕地を得るためには、農業の機械化 (当時は動力革命には遠く、手工業的につくられる新型の農機具の範囲) によって農村の「改善」をはかるべきだと NAGEL (1831) は述べている。農村 (Land) の景観の決定的な要素である耕地のありように何らかのかたちで言及しなければならなかったと思われるが、上に述べた「耕地」の捉え方は、いずれも審美性を求めるが故の農村の改善＝農業の振興、農法の改良であった。19世紀前半に自然科学の基盤をもつ近代農業がテア (A.

図-4
三辺に農業・造園・建築の語を配し、葉や花が三角形を円状にとりまき、中央に国土美化が花咲くというデザイン (DÄUMEL, 1961)

D. THAER によって確立されるまでは、農業はその基盤を官房学（国家と御料地、荘園制の法的な問題を扱う）においていた。したがってこの時代の農業は少なくとも彼らにとって自然科学的な対象ではない。つまり耕地としての立地や作目の適性は植物の生理や土壌の条件から判断されるものではなかった。国土美化の一端を担う農業に対するフォアヘアの願望は、耕地を管理する農業者（領主・地主）にできるだけ理解を求め、「美化」に配慮してもらうことであった。いずれにしても農業に関しては理論的かつ実践的にも容易に踏みこめる領域ではなく、開墾や土地改良（Landeskultur）の事業を除いては、「耕地」は彼らにとって眺める対象にとどまっていた。

4. 美化協会の活動

(1) 美化協会の発生

ミュンヘンの特別委員会の活動を契機に、同種の組織が各地に形成されるようになった。1823年にフォアヘアは、国土美化を標榜する協会がいたるところにできることを憂慮し、資格¹²⁾のある人々で団体が組織されねばならないと述べている。しかし1830年には、国土美化のための協会設立を結局特別委員会の機関誌『月刊・建築土木と国土美化』などの雑誌を通じて呼びかけることになり、地主や牧師、郡長は公共の福祉のために、この世話役をひきうけることが求められた。

ミュンヘンの特別委員会とは別に自らの都市(Heimstadt)の美化を課題とする団体がさまざまな都市で結成された。1820年にドレスデンでこの種の美化協会が熱心に活動していることが報道されている(In. Allgemeine Preußische Staatszeitung)。美化協会(Verschönerungsvereine)が非常な勢いで増加したのが1830～40年である。この頃になると大都市からごく小さな町にいたるまで美化協会が組織されていた。ベルリンでは美化協会は、王立園芸促進協会の支部としてローカルな活動を担当していた。協会担当に同一の会則をとりかわし、情報を交換したり、活動に要する材料確保のための苗圃をもっていた。この点では、プロイセンの美化協会は王立園芸促進協회를頂点に統合組織化されていたといえる。

(2) 美化協会の活動とその評価

フォアヘアの国土美化提唱以来の特別委員会の活動や19世紀前半に美化協会が各地で結成する状況は一種熱狂的な流行ともみえるが、美化協会と一般的によばれる団体は今世紀にいたるまで存続するのである。美化協会は主として都市および近郊のオープンスペースに施設を自ら設置したり、地方自治体当局を支援する団体であった。しかし美化協会によってつくられた施設は、専門家がたいてい酷評する代物であったという(DÄUMEL, 1961)。19世紀末から今世紀初頭にかけての美化協会の活動に対して RÜMLER (1902)¹³⁾は、「美化協会の幹部のほと

んどが庭園を趣味道楽でやっているシロウトであり、国土美化には不十分な矮小な見地から自らの課題を把握している」と評し、また MIELKE (1908)¹⁴⁾は美化協会のなす悪行のために国土美化(Landesverschönerung)という名前のイメージはきわめて悪く、これを改称しようと提案しているのである。自然地のなかに団体名を大書したベンチを配したり、不細工な丸太小屋をたてたり、装飾過多の庭園の点景物を置いたりすること、森や樹木のそれぞれに少女趣味の名称をつけたり、また SALISCH¹⁵⁾が指摘するように立木10本ごとに派手な色彩の道標をたてたりすることが「美化協会」と「国土美化」のイメージを悪くした原因であろう。

一方、美化協会のいくつかは、行政の一部局として組織され現在の公園・緑地課の原型となった。ミュンヘンの機関誌『月刊・建築土木と国土美化』(1824)では、プロイセンの美化協会が政府の公的機関として組みこまれていることを伝えている。美化協会によって建てられた多数の施設のいくつかは、その管理と保存のために役所の特別な部局を設けたり、専門の職員を任用することになった。しかし、美化協会の活動が盛んなため、役所の関連部局がただちに形成しない場合もある。たとえばシュトゥットガルトの美化協会は、自ら公共緑地施設を設置したが、自力で維持管理ができなくなったため、自治体の資金援助を得ながら運営を続けた例である。¹⁶⁾

19世紀の半ば頃には、国土美化の大きな飛躍や意欲的な試みはほとんどみられず、その思想の一端はただ美化協会の活動のなかでかろうじて生きのびてきたといえる。¹⁷⁾

5. ま と め

この時代の技術人は先進的文明の旗手といえよう。国土美化を提唱したフォアヘアは、当初その担い手として英知を備えた支配者を待望するのが果せず、転じて農会(国家の経済＝農業にかかわる知識人と技術人の団体)などに働きかけ、国土美化のための特別委員会を設置するのである。フォアヘアらは国土美化が、農業・造園・建築の3者の統合によって実現されると考えたが、自己の職域を通じて実際にかかわったものは、施設や道路の建設、集落整備、農地造成といった建築・土木の範疇のものであり、3者統合の理念は執筆・教育活動のなかで語られるものであった。国土美化運動は、彼ら自身の技術で民衆の生活領域を庭のような理想郷に変えようとする試みであり、その審美的原則は英国風の庭園イメージに拠っていた。

ミュンヘンの特別委員会が解体消滅した後にも市民団体による美化運動が存続し、不十分なながらもこれが国土美化の思想を今世紀に伝えたとされている。19世紀前半における多数の美化協会の発生と熱心な運動の展開に対し、フォアヘアは「資格のないものがやっている」と否定的であり、「識者」層にこの運動のイニシアティブをと

るように呼びかけるほどであった。後に醜化協会と酷評される美化協会の所業は、ドイメル(1961)が指摘するように「美化」を単に飾りたてると解釈し、改善の視点をもたなかったことによるものであろう。しかし特別委員会時代には少数の知識人だけのものであった国土美化の思想が美化協会の活動を通じて初めて大衆化したのではないだろうか。美化協会の活動が目先のきかない大衆運動と批判されつつも、この間に環境問題に対するかかわり方が、市民層において育成されていたといえよう。同時に美化協会の試行錯誤は、19世紀末から今世紀にかけての郷土保護運動、自然保護運動、田園都市運動などの復興運動の下地を形成したと思われる。

文献および註

- 1) ——— (1983): ドイツ農村美化の発生期における実践と理論の社会的成立基盤, 農村計画学会誌, Vol. 1, No. 4, 8—9
- 2) DÄUMEL, G. (1963): Gustav VORHERR und die Landesverschönerung in Bayern, Festschrift für HEINRICH FRIEDRICH WIEPKING (hrsg. v. K. BUCHWALD, K. MEYER, W. LENDHOLT), Beiträge zur Landespflege-Band 1, Verlag Eugen Ulmer Stuttgart, 338
若い建設技術者の養成には力を注ぎ、すでに1817年から職業訓練校で理論的、実践的な授業を行なったり、訓練生に賞を与えるなど教育に熱心に貢献していた。
- 3) ——— (1984): バイエルンのG. フォアヘアによる国土美化の提唱 (19世紀初頭), 造園雑誌 Vol. 47, No. 5, 21
- 4) DÄUMEL, G. (1961): Über die Landesverschönerung, Im Verlag Hch. Debus—Geisenheim/Rheingau, 110
- 5) 1815～48年間にドイツ連邦のほぼ全域が農会網でおおわれることになる。
HAUSHOFER, H. (1972): Die deutsche Landwirtschaft im technischen Zeitalter, Deutsche Agrargeschichte, Bd. V, Verlag Eugen Ulmer, 99—100, 邦訳: 三好正喜・祖田修訳(1973), 近代ドイツ農業史, 未来社, 71—73
- 6) ——— (1984): 前掲書 22—23
- 7) DÄUMEL, G. (1961): 前掲書 112
- 8) HENNEBO, D. (1956): Ein Beitrag zur Geschichte der Landesverschönerung. In: Das Gartenamt, 48
- 9) BUCHWALD, K. (1968): Geschichtliche Entwicklung von Landespflege und Naturschutz in Nord-, West- und Mitteleuropa; Handbuch für Landespflege und Naturschutz, Bd. 1, Bayerischer Landwirtschaftsverlag, München, 100
- 10) DÄUMEL, G. (1963): 前掲書 335—337 参照
- 11) 井手久登 (1968): Gustav Vorherr における Landespflege; 造園雑誌 31 (4), 19—24
- 12) 国土美化を推進する人の「資格」と組織の構成について、フォアヘアは次のような例をあげている。2名の行政事務官、とくに優秀な国家経済学者であること。指揮者たるべき経済・行政の知識をもつこと。そして政府の建築家、営林署長、すぐれた造園家、有能な医師、及び自然科学者、軍人、教養のある地主、1～2名の優秀な土木技師
VORHERR, G. (1825): Fingerzeig zur Errichtung von Bau- und Landesverschönerungsdeputationen. In: Monatsblatt für Bauwesen und Landesverschönerung, Jg. 5, 27 < DÄUMEL, G. (1961): 前掲書 115 より >
- 13) RÜMLER, Th. (1902—3. Aufl.): Illustriertes Gartenbau Lexikon, Berlin
- 14) MIELKE, R. (1908): Heimatschutz und Landesverschönerung; In: Die Gartenkunst, 156
- 15) SALISCH, H. V. (1911—3. Aufl.): Forstästetik, Verlag von Julius Springer, 360
- 16) GÖTZ, H. (1937): Der Verschönerungsverein der Stadt Stuttgart 1861 bis 1936, 48—49
- 17) BUCHWALD, K. (1968): 前掲書, 101

Zusammenfassung: VORHERR, der am Anfang des 19 Jhts. einen Vorschlag zur Verschönerung Deutschlands machte und das Interesse an sein Hinweis überall mit großen Elan erwachen ließ, organisierte münchener Deputation für Landesverschönerung. Nach der politischen Veränderung löste sich 1830 zwar die Deputation auf, aber Verschönerungsverein übernahm teils die Tätigkeit der Deputation. Was die Verschönerungsvereine gedankenlos geschaffen haben, wurde so kritisiert, daß sie unter Verschönern=Garnieren, und nicht Verbessern verstanden. Es ist doch möglich, die Tätigkeit der Verschönerungsvereine als ein Prozeß zum Popularisieren des Landesverschönerungsgedanken zu betrachten. Obwohl es manchmal nicht perspektivisch war, wuchs inzwischen das Ethos durch verschiedenste Versuche der Landesverschönerung, d.h. man nimmt starkes Interesse an der Umwelt, das seit der Jahrhundertwende auf die Erneuerungsbewegung wirken sollte.